

釜ヶ崎の赤いげ先生

— 本田良寛伝 —

《9》

覚悟の死

「貧しいがために救われない命、そんなアホなことがあってたまるか」と、約22年間にわたって釜ヶ崎の日雇い労働者の医療に献身的に尽くした本田良寛先生は、1985年7月1日、胃がんのため60歳で亡くなった。現代の感覚で言えば、まだ元気で働ける年齢である。

良寛先生を慕って一緒に働いた経験がある大阪医療刑務所長、加藤保之さんは「本田先生はがんが見つかり市大医学部で同期だった信頼を寄せる第1外科の教授に自分の手術を依頼した。いったん職場に復帰したが、再発し帰らぬ人となった」という。

また、大阪市立大医学部から派遣されて良寛先生のもとで働いた経験のある元大阪市長で医師の関淳一さんは「憂快な先生で何よりも労働者に寄

医療向上に捧げた22年



伊豆への職員旅行中の良寛先生(右)



大阪社会医療センターの職員と餅つきをする良寛先生(右)

私は釜ヶ崎を離れない

「釜ヶ崎でいなくなる」とは良寛先生にとっては覚悟の死だった。良寛先生は遺言をのこしている。「私は遺言を書く。そ

くためには、どんなことがあっても、私は釜ヶ崎を離れない。それが私のケ崎に、と。一歩一歩確

自分に問いかけて、いい聞かせている言葉でもあ「葬式はせんでええ」とる。」(本田良寛著「釜ヶ崎かて明日がある」) 良寛先生は自分自身に對する批評についてもこ「私のやっている仕事をイデオロギーだとかヒューマンイズムだとかいう人があるが、これは「免物事が解決すれば、こんな簡単なことはない。そ

いいが、何の役にも立たないと思っている。こういう立場から、私は、「見聞、聞く」という、いわゆる「見る、聞かす」と遺影に語りかけた。その間、良寛先生が作

労働者ら涙

良寛先生が胃がんで亡くなったことを知った釜の多くの労働者は「良寛先生はわしらの健康ばか亭松鶴さんと良寛先生と

(おわり)